

第151回東京オペラシティ定期シリーズ

1月26日(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第978回サントリー定期シリーズ

1月27日(金)19:00開演 サントリーホール

第979回オーチャード定期演奏会

1月29日(日)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

1/26

1/27

1/29

指揮：チョン・ミョンフン

コンサートマスター：三浦章宏

シューベルト：

交響曲第7番 口短調 D 759『未完成』(約28分)

- I. アレグロ・モデラート
- II. アンダンテ・コン・モート

－ 休憩 (約15分) －

ブルックナー：

交響曲第7番 ホ長調(ノヴァーク版)(約65分)

- I. アレグロ・モデラート
- II. アダージョ：非常に荘厳に、かつ非常にゆっくりと
- III. スケルツォ：非常に速く
- IV. フィナーレ：運動的に、あまり速くなく

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)|

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura(1/29)



※演奏中や曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

※演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なるお席への着席をお願いすることがございます。

※演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場については、楽曲の進行により係がご案内いたします。ご入場いただけない場合もございますので、ご了承ください。

※演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

## 出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者(1984～1989)、パリ・オペラ座バステューユ音楽監督(1989～1994)、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者(1997～2005)、フランス国立放送フィル音楽監督(2000～2015)。現在は名誉音楽監督、ソウル・フィル音楽監督(2006～2015)、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者(2012～)など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティストック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名誉指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

1/26

1/27

1/29

## 楽曲紹介

シューベルトとブルックナー。この2人の作曲家には、宿命的に似たところがある。直線的にゴールへ進むのではなく、同じフレーズを反復して渦のごとき巨大なうねりを作ってゆくこと——ベートーヴェン以後のシンフォニーに新風を入れたその響きは、どこか無限につづく天国的な時間感覚へと、私たちの意識をいざなってくれる。

今回の“2つの7番”を、チョン・ミョンフンは「クラシック音楽を代表する最高傑作」と呼び、演奏するたびごとに「何か新しいものを見つけないか」作品だと語る。チョン・ミョンフンと東京フィルハーモニー交響楽団の手で『未完成』が鳴り響くのは16年ぶり、ブルックナーの7番はじつに20年ぶりである。音楽史に新しい道をひらいた2作が、混迷の時代にどんな「新しいもの」を灯してくれるだろうか。その時間にじっくり浸りたい。(堀 朋平)

### シューベルト

解説=堀 朋平

### 交響曲第7番 口短調 D 759『未完成』

フランツ・シューベルト(1797-1828)の第6番までの交響曲は、1年にほぼ1作の割合でスムーズに生み出され、半ばプライベートな場で披露された。そんな若書きのスタイルに、しかし23歳ころの青年は別れを告げ、大きな一歩を踏み出す。巨人ベートーヴェンを超える大曲を——。

この野心は、本作の調(口短調)にあらわれている。そう、これはベートーヴェンが交響曲で選ぶべくもない調だ。当時の管楽器では音が鳴らしにくいからである。堂々たる口短調作品の登場は、バルヴが活躍する時代——たとえばチャイコフスキーの『悲愴交響曲』(1893年)——を待たなくてはならなかった。

さて、構想はピアノ・スケッチをふまえて慎重に練られ、第2楽章まで完璧に仕上げられた。が、第3楽章で筆は止まる。表紙に「交響曲口短調 フランツ・シューベルト自筆」と書かれたスコアは、ウィーン南西の都市グラーツで音楽協会の監督を務めていた友人の手にわたった。この友人アンゼルス・ヒュッテンブレンナー

はピアノ譜を作って当地での上演を試みたのだが、けっきょく43年のあいだ陽の目をみることはなかった。

興味深いことに、シューベルトが協会に送ったとされる感謝状は——さらにはスコアの表紙にある日付さえも——作曲家の筆ではない。それはヒュッテンブレンナーの筆跡と酷似する。つまり本作の成立年はじつは不詳である。自筆譜がいつどのようにして作曲家の手を離れたかも定かでない。いかなる名探偵も、200年前の出来事を跡づけるにいたっていない。



A.ヒュッテンブレンナー(中央)とシューベルト(右) J.D.テルチャーによるリトグラフ、1827年

「未完成の謎」は深まるばかりなのだが、2つの楽章には“闇と光”をめぐる心からのメッセージが込められている。

**第1楽章**では、冒頭はやくも最低音に触れんとするコントラバスと、まんなかで轟くトロンボーンに注目しよう。花売りの歌に由来するとされる第2主題は、長-短の強打(当時「葬送」の意味をもつリズム)で断ち切られてしまう。つまりこの楽章は、“闇における歌の喪失”を描いている。

**第2楽章**の第1主題は、調も節まわしも、『冬の旅』で東の間の陽光を放つ「菩提樹」の囁きかけと同じだ。まもなく孤独なさすらいが回帰するも、光の主題がこれを包み込んで終わる。つまりこの楽章は、“光による歌の回復”を描いている。

「永遠なる至福の世界が、一挙に、まるで瞬間のうちに押しよせてくるのを僕は感じた……」。自筆メルヒェン(1822年7月3日)のラストは、第2楽章を言葉にしたものだろう。文学と音楽、歌曲と器楽のあいだで心情をまっすぐに吐露した人——それがシューベルトという作曲家である。

【作曲年代】1822年 【初演】1865年12月17日、ウィーンにて

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

ほりともへい／1979年生まれ。国立音楽大学・西南学院大学ほか講師。専門は音楽美学。2013年、東京大学大学院・後期博士課程修了。博士学位論文にて日本シェリング協会研究奨励賞を受賞。近著『わが友、シューベルト』(アルテスパブリッシング、2023年)。

## ブルックナー 交響曲第7番 木長調(ノヴァーク版)

解説=広瀬大介

1/26

1/27

1/29

生涯に交響曲と宗教曲以外をほとんど手がけなかったアントン・ブルックナー(1824-1896)にとって、オペラの世界で次々と革新的な音楽を生み出すリヒャルト・ワーグナーは、神の如き存在であったろう。1881年9月に交響曲第6番の作曲が終了し、同月には早くも「第7番」の作曲が始まっている。1882年には第1楽章、第3楽章の順に作曲が進められ、1883年1月に第2楽章のスケッチが完了した。2月13日、ワーグナーがヴェネツィアで客死。この報せを受け取ったとき、ブルックナーは第2楽章の仕上げを施していた。圧倒的な盛り上がりを見せ、やがて静かに終わっていくその終結部(練習番号X以降)について、ブルックナーは「巨匠のために心からの葬送音楽を書いた」と述懐している。同年9月5日には第4楽章の作曲を終わらせた。当時ライプツィヒ歌劇場で活躍していた指揮者アルトゥール・ニキシュに、この曲の初演を直談判し、1884年12月には同地での初演が実現。翌年にはミュンヘンでも演奏が続く。この上演によって、ウィーンにおいてもブルックナー作品への興味がかき立てられ、この作品は「はじめてブルックナーが大々的な成功を収めた」作品としての地位を確立した。

「第5番」では形式的要素を、「第6番」では歌謡的要素を前面に出したブルックナー。続く「第7番」では、両者をほどよく調和させようと試みたように思われる。「第5番」において、ブルックナーは複雑かつ精緻極まるポリフォニーを駆使し、バッハ以来のドイツ音楽の伝統をみずから完璧に身につけていることを印象づけた。逆に「第6番」では、その複雑さを反省したのか、敢えてわかりやすく、旋律そのものを聴かせる方向へと舵を切る。「第7番」が大成功を収めた要因のひとつには、こうした両極端な音楽の性質をバランスよく持ち合わせ、それを効果的に聴衆へと伝える術をブルックナーが会得したため、とは言えないだろうか。

かすかな弦楽器のトレモロとともにホルンとチェロによって第1主題が始まる**第1楽章**の冒頭こそ、「第4番」などと同様の、ブルックナー独自の曲冒頭部分である。3つの主題を順番に登場させる独自のソナタ形式も自身のこれまでの様式を踏襲しているが、50小節を超える規模の大きな終結部には、それらを突抜けた作曲家の自信があふれている。

この作品にも他の作品と同様に版問題が存在するが、作曲家自身が改訂を施していないので、初版(1885年)、ハース版(1944年)、ノヴァーク版(1954年)ともに、その違いは大きくない。もっとも議論となるのは、**第2楽章**の練習番号Wにおける打楽器の扱い。ティンパニ、トライアングル、シンバルは後から総譜に紙が貼られて付け足されたものの、その右上に「無効」と書き入れられている。レオポルト・ノヴァークは、この「無効」をブルックナーの筆跡ではないと判断して打楽器を採り入れたが、現在ではやはり作曲家の筆跡なのでは、という説も登場しており、その判断は指揮者に委ねられている。この楽章最後で活躍するワーグナー・チューバは、『ニーベルングの指環』においてワーグナーが陰鬱な地底の雰囲気を描写するために生み出したもの。独特の荘重な、それでいても哀しい雰囲気を生み出している。

**第3楽章**のトランペットによる冒頭主題は、雄鶏の朝の鳴き声からヒントを得た、といわれる。7度で下降するモチーフを自然につなぎ合わせる巧みさに、ブルックナーの進境が感じられよう。**第4楽章**でも3つの主題が用いられるのは定例通りだが、第1主題を変形して登場する第3主題は、全楽器によるユニゾンで荒々しく演奏される。再現部では、普通は1、2、3の順番に演奏される主題が、逆に3、2、1の順で登場し、その輝かしい雰囲気のままに終結部へと至る。この交響曲の成功に自信を得たブルックナーは、各楽章の規模をより膨らませた形で、次の交響曲に取り組むこととなる。

【作曲年代】1881～1883年 【初演】1884年12月30日、ライプツィヒ歌劇場にて。アルトゥール・ニキシュ指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ワーグナーチューバ4、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦楽5部

ひろせ・だいすけ(音楽学、音楽評論)／1973年生まれ。青山学院大学教授。日本リヒャルト・シュトラウス協会常務理事・事務局長。著書に『オペラ対訳×分析ハンドブック シュトラウス／楽劇 サロメ』(アルテスパブリッシング、2022)など。『レコード芸術』など各種音楽媒体での評論活動のほか、NHKラジオへの出演、演奏会曲目解説・CDライナーノーツの執筆、オペラ公演・映像の字幕・対訳などを多数手がける。